

第四問

- ロ 科学は、人間が主体と客体を切り離して考える方法を確立したことによって進歩した。
- × ハ 科学の進歩への反動によって、今日、人間の感覚を重視する風潮が強まっている。
- ニ ダンテにとっての宇宙とは、科学的に捉えられることのない宗教的な世界だった。
- ホ ガリレオに感動をもたらした望遠鏡の観測は、他方で、人間の感覚の排除を促した。

テキストからの解放

第五問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

- ① 「オオカミは、フツと吹いてブツと吹き、ブツと吹いてフツと吹き、フツと吹いてブツと吹きました。」「声の文化と文字の文化」を書いたW・オングは、『三匹の子豚』を読んで聞かせるとき、娘にせがまれてこんなふうに読むことにしていた。★テキストに書かれていたのは、「フツと吹いてブツと吹き、フツと吹いてブツと吹き、フツと吹いてブツと吹き」だったのだが。

- ② 二〇世紀のドイツ語で、おそらくいちばん厳しい詩を書いたパウル・ツェランですら、自作朗読ではテキストから逸脱することがある。「死はドイツ出身のマイスター」を響かせる有名な詩(死のフーガ)の場合、テキストで singet und spielt (歌って弾け)となっている箇所を、spielt weiter zum Tanz auf (ダンスの バンノウをつづける)と朗読している。私たちは普通、ツェランのような現代詩を「読む」とき、疑問符とピリオドのちがいひとつ見落とさないように、目を皿のようにして文字テキストを追いかける。△が、ツェランの詩の朗読を聞くと、疑問符とピリオドのちがいはイントネーションだけでは区別できないことが多い。

- ③ ほかの作家の自作朗読でも、テキストと朗読には、たいがい小さなイドウがある。たんなるミスなのか、意図的な変更なのか。それはわからないが、「オリジナル」とは、その程度の曖昧さを許容するものなのかもしれない。さつき私はテ

〔出典〕

おかざわしずや
丘沢静也

『マンネリズムのすすめ』

〔著者出題歴〕

- ・ 福井大学
- ・ 神戸大学
- ・ 成蹊大学

第五問

- キストからの逸脱と書いたが、そもそもそういう発想のほうで逸脱しているのかもしれない。
- ④ 本に書かれているテキストでも、読み聞かせるときに変更される。口伝えの話となると、なおさらだ。受けを狙って、語り手は聞き手の顔色を見ながら、話の内容をおもしろおかしく調整していく。伝言ゲームがいい例だが、意図しない場合でも「もとの」話からずれていく。いったいメールヘンのような口伝えの話は、どうやってオリジナルを確定するのだろうか。
- ⑤ 私たちは「オリジナル」にこだわらずにいるのかもしれない。
- ⑥ 現代では、文書による契約のほうが、口約束より偉いとされている。相手にたいする信頼が絶対でないとき、私たちは文書をかわして契約する。文書による契約は、相手を信頼していないという証拠だ。人間は神に誓うとき、文字を介さず、声を出して誓う。信頼関係がしつかりしていれば、口約束で十分なはずだ。といって私は、信頼関係の希薄化や、ソウシツを嘆いているわけではない。人間は信用のできない動物であるし、記憶力も当てにならない。社会もサイズが大きく、複雑になっている。だから文書による契約は不可欠だ。
- ⑦ 私たちがオリジナルにこだわるのは、文字と深く関係するのではないだろうか。
- ⑧ 文字を書く文化がはじまったのは、E・A・ハヴロックの『プラトン序説』に

2

2

- よると、紀元前四世紀のプラトンの時代。文字を手で書くという技術のおかげで、コンテキストにシナラれない抽象的な概念（たとえば「正義」）が生まれ、アイデアといった抽象的な思考が可能になってくる。
- ⑨ 文字のテキストは、声とはちがって視覚的で、いわば冷凍食品のようにコチコチだが、声よりも長持ちする。遠くの読者に届けたり、コピーして多くの読者に配達することもできる。誤配の可能性もあるが。テキストは、生み出されたコンテキストとは別の、生きたコンテキストのなかで解凍され、場合によってはちがった味に調理されて、食べられるのである。
- ⑩ 印刷機の発明で、文字テキストが流通するようになると、テキストがテキストとして存在しつづけるためには、いくつかの目印が必要となる。誰が書いたのか（著作権）。ほかのテキストとの違い（独自性）や新しさ（創造性）。それらを目印にしてテキストを扱っているうちに、それらが偉いものに思えてくる。なくてはならないものだと勘違いされるようになる。
- ⑪ だが、著作権とか独自性とか創造性は、テキストという土俵にこだわっているから、気になるだけの事柄なのかもしれない。私たちは言葉を使うときに、どの言葉にも毎回、「広辞苑によれば」などとバカバカしい引用指示をつけるだろうか。
- ⑫ テキスト至上主義からちよつと距離をとれば、個性とかオリジナリティは些

4

7

と漢字に改めよ。

1001

1001

1000

--	--

六十字以内で説明せよ。

[illegible]

傍線部

ているものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

り。

を

2

希 望

適

傍線部

き出し、その最初の五字を答えよ。

傍線部

び、記号で答えよ。

とだということ。

生の一部としての死

ロ 口伝えの話は語られ伝わっていくうちにその内容を変化させていくが、そうしたことが生じるのは、語り手に話の内容を変えようという意図があるからにほかならないということ。

ハ 口伝えの話には個性やオリジナリテイなどにとらわれない自由さがあるが、書かれたテキストは、どうしても作者の個性やオリジナリテイに束縛されてしまうということ。

ニ メールヘンのような口伝えの話はもともとオリジナルが確定できないが、それが書かれたテキストとなつてオリジナルなたちが確定すると、ほとんど変化はしなくなるということ。

ホ 書かれたテキストも口伝えの話も、多くの人に読まれたり聞かれたりしながら伝わっていくうちに、その内容や言葉や解釈のされ方がおのずと変化し定まっていくものだという事。

第六問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① その五月の気持の良い昼下がりに、昼食が済むとキズキは僕に午後の授業はすつぽかして玉でも撞きにいかないと云った。僕もとくに午後の授業に興味があるわけではなかったので学校を出てぶらぶらと坂を下つて港の方まで行き、ピリヤード屋に入つて四ゲームほど玉を撞いた。最初のゲームを軽く僕がとると彼は急に真剣になつて残りの三ゲームを全部勝ってしまった。約束どおり僕がゲーム代を払った。ゲームのあいだ彼は冗談ひとつ言わなかった。これはとても珍しいことだった。ゲームが終ると我々は一服して煙草を吸った。

「今日は珍しく真剣だったじゃないか」と僕は訊いてみた。

② 「今日は負けたくなかつたんだよ」とキズキは満足そうに笑いながら云った。

③ 彼はその夜、自宅のガレージの中で死んだ。N360の排気パイプにゴムホースをつないで、窓のすきまをガム・テープで目ばりしてからエンジンをつかさせたのだ。死ぬまでにどれぐらいの時間がかつたのか、僕にはわからない。親戚の病氣見舞にでかけていた両親が帰宅してガレージに車を入れようとして扉を開けたとき、彼はもう死んでいた。カー・ラジオがつけっぱなしになって、ワイパーにはガソリン・スタンドの領収書がはさんであつた。

④ 遺書もなければ思いあたる動機もなかった。彼に最後に会つて話をしたという

〔出典〕
村上春樹
『ノルウェイの森』

〔著者出題歴〕
・秋田大学
・筑波大学
・千葉大学
・静岡大学
・学習院大学
・専修大学
・立命館大学
・関西大学